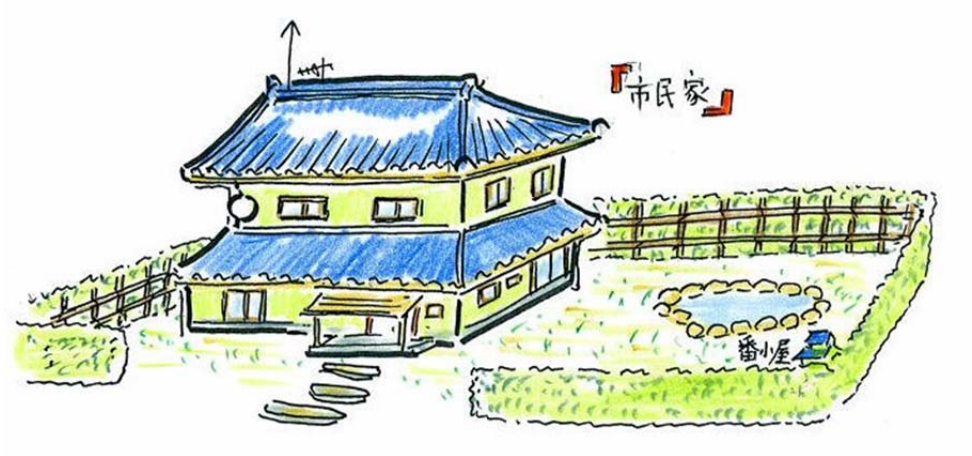
✦✦支援くんの火災予防奮闘記✦✦

これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。

物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。

　そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年５歳になる市民家の長女 援(えん)ちゃん には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

　点得(てんとく)幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！

援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦労の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

<u>主な登場人物</u>

援ちゃん　5歳

支援くん　　ご助（中間）

ミーちゃん（飼い猫）

ママ

パパ

閻魔様

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.21

先日、NHKのお天気コーナーで南さんが北陸もようやく梅雨明けしたとアナウンスしておった。

それで旦那様は雨具の用意もせずに火伏神社と云われる秋葉神社へ参詣に出かけられたのじゃが、何でも秋葉神社の神様が夢枕に立たれ参詣せよと命じたとか仰っておられたが。

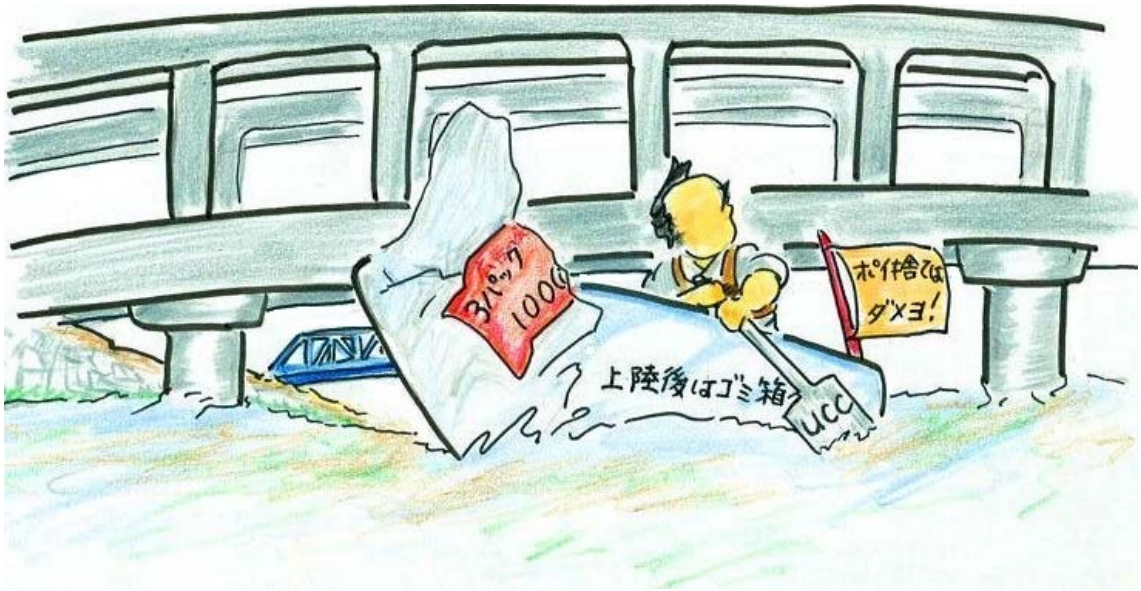
ですが日頃の行いのせいでしょうかの、旦那様が出立されてからにわかに入道雲が湧き上がりましてな、ザアアーと大雨に降りこめられて秋葉のお社で雨宿りすると連絡がありましたのが三日前のことですじゃ。

旦那様がお戻りにならないのが、かように心地よいものかと束の間（意：少しの間）喜んでおったのじゃが、そこは問屋が卸さぬ（意：上手くいかないもの）の道理。援姫様のお相手はとても一人で勤まるものではございませぬ。

それで「うぬぬう・・も、もしや旦那様はあっしに姫様を押し付け、金石温泉での長逗留を決め込んでおるのではあるまいな？」と旦那さまへの不信感が。

一度湧いた不信感は日を追って大きくなり、遂には確信へと変わりましたのじゃ。

「お帰りにならないのならお迎えに参るまでじゃ。」と挟み箱にアヒル隊長とタオルを詰め込み、明け六つ（午前６時）に金石温泉を目指して千日町は、新橋の渡しに掛かっておった刺身船に乗りこむと犀川を下ること数刻、申の正刻（午後４時）には金石海禅寺町の渡しへと着きましたのじゃ。



「このまま金石温泉に向かい旦那様がいなかったら事じゃから、念のため秋葉神社へ回ってみるかの。」とひとり言を言いながら秋葉神社の鎮火社へと向かいましたのじゃ。

　亀山、後宇多天皇の御代ともいわれる文永年間（13 世紀後半）の創建と伝えられ、前田のお殿様の尊崇が篤くしばしば鎮火の祈祷を命ぜられたというお社に着いたのは夕闇の迫るころでした。

　雨のなか、境内をみまわしても人の気配はなく、やはり旦那様は金石温泉じゃろうと踵（きびす）（意：かかと）を返そうとした刹那　ドドーン　と凄い雷鳴がと

どろき、雨足が一層強くなりましてな「こ、これは堪らん。」とあっしはお社の中へと避難したのですじゃ。

「い、意外と暗い、お社の中は、こ、恐いのぉ・・・」と言いながらお社の中ほどへ進み、手ごろな腰掛を見つけ座り込んだのじゃが、それを待っていたかのように第二の雷鳴が鳴り響いたのですじゃ。

『ベカッ』と稲妻が社の中を突き刺し、その眩しいばかりの光の中であっしは見たんでさ。この世の物とも思われぬ大きな頭だけの生き物がギロッとあっしを睨んでいたんでさ。

「ひぃぃっ、く、食われるっ。」とあっしは腰を抜かしてしまったんですが、そこは若い時分に器械体操で鍛えた強靭な上半身のおかげ、脚前挙（きゃくぜんきょ）（意：体操の技）の離れ技でお社を飛び出し、きざはし（意：階段）を転げるように降りると、お社の縁の下へと逃げ込んだのですじゃ。

しかし・・・そこには思いがけない先客がおいでじゃった。

「・・・ご、ご助か？」と暗闇から問いかけて来たのは旦那様ではありませんか。

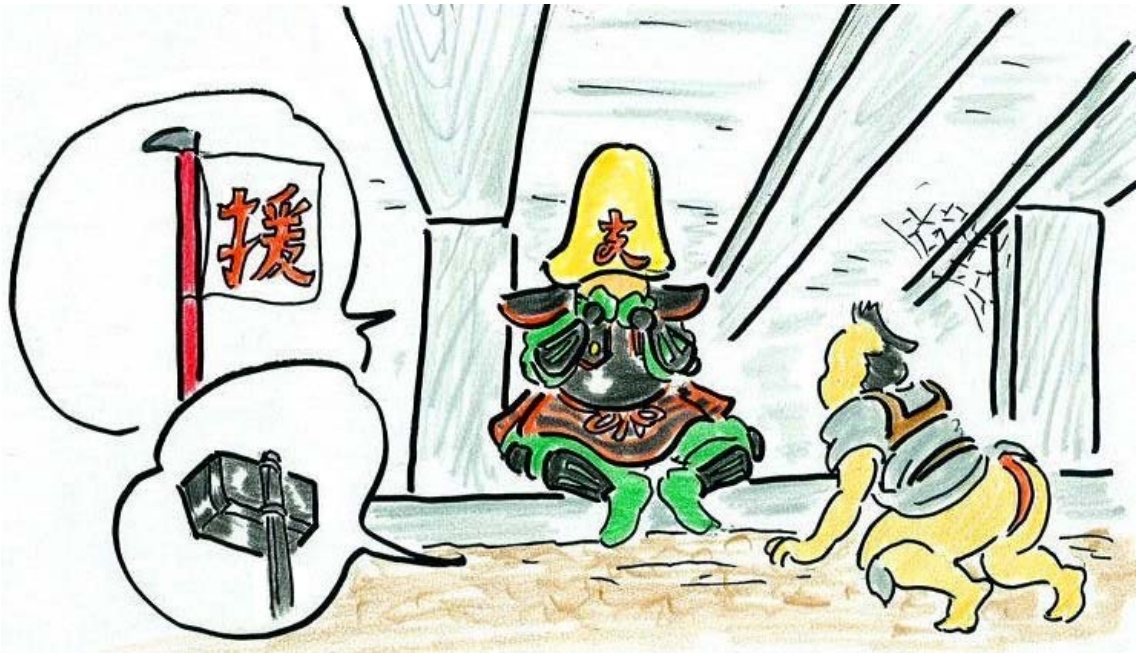
「だ、旦那様っ。」と安どでしがみつくあっしに

「ご、ご助、やはり来てくれたのか？」と旦那様は大喜び。

「な、なにを喜んでおられるんで？あ、あんな化け物がいるのなら何で携帯で教えて呉れねえんですかい！」と詰め寄るあっしに旦那様は

「あんなのが居ると言ったらおのれは来んじゃろうが。黙っておればおのれのことじゃ、旦那様は金石温泉にでも入っておると邪推し駆けつけてくるじゃろうと思ったのさ。やっぱり・・・来たのぉ。」と仰ると

「それで拙者の旗指物は持ってきたか？あの化け物の台に立てかけてあったじゃろ？」と続けるんでさ。



「な、なにをたわけたことを！おかげであっしの挟み箱まで置いてきちまったじゃねえですかい！」とあっしが申しますと

「な、なにをしておるのじゃ。三日もこんな暗いところで待っておったのに。このたわけがっ、さっさと取り返して来い。」と叱り返して来たんでさ。

「な、何をおっしゃる、たわけは旦那様じゃ。家来だけを危ない目に遭わせなさるんですかい？」と詰め寄れば

「うぬぬぬぅ・・では、じゃんけんじゃ。」と言い放ち「最初はグーじゃんけん・・・ぽんっ」

で旦那様が出したのはグーであっしはパー。

勝った・・・筈なのに旦那様の右指がチョキに変化し「勝ったー」の叫び声が

「あ？あぁっ？あと出しは汚いですぜ旦那様っ」と不正を指摘すると

「な、何を申す、家来は主人に忠誠を尽くす。これが戦国の習いじゃろ。心配するな拙者も一緒に参るから先導せい。」と偉そうに言うんでさ・・・。

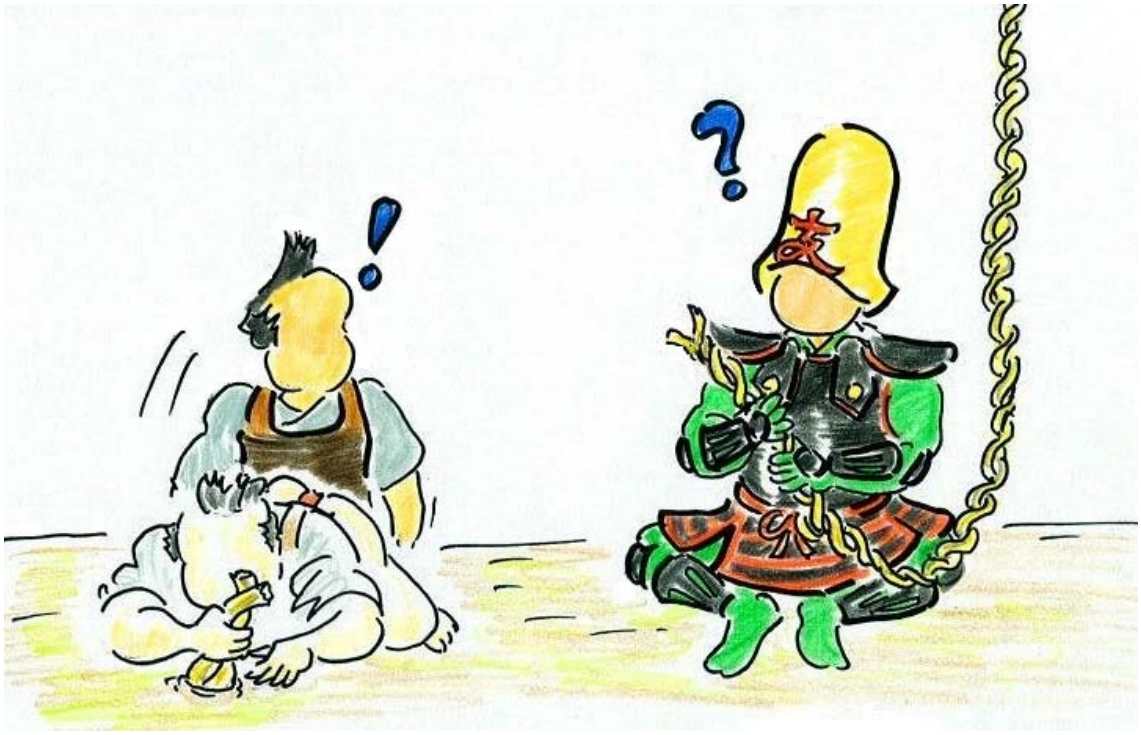
旦那様は結局先に行く勇気が無いだけなんですが、それはあっしも同じ思い。

一緒なればと主従連なって縁の下を這っておりますと見慣れない黄銅線が地中から生えておる所に出くわしましたのじゃ。

「だ、旦那様・・これは何でしょうかね？」とお聞きするあっしの後ろで

「ご、ご助よ・・・これは何じゃろうかの？」と言う旦那様は、はるか上空から垂れ下がる同じく見慣れない黄銅線を手にしておられたのじゃ。

「こ、これは！？」黄銅線の切断面を見比べていたあっしは「それをこちらへ！」と旦那様を呼び寄せると断面を合せてみたのじゃ。



「み、見なせい旦那様。ピッタリじゃ。」と言おうとしたとき、あの恐ろしい声を聞いたのじゃ。

その恐ろしい声はお社の中から聞こえた・・・いや聞こえたような・・・いいや　「お待たせいたした雷神様、今じゃっ！」と確かに聞こえたのじゃ。

その刹那、ドドドドドーォン　と光よりも早く　大音響が鳴り響いたのじゃ。

「な、何じゃ？」という旦那様のお声は大音響に続く光の中でかき消され、あっしと旦那様の体を経験したことのない激痛が突き刺していったのじゃ。

薄れゆく意識の中で「獅子殿どうじゃな？」と天上からの声に応え

「雷神様の一撃で避雷針の断線も復旧したようです。」と社の中から低い声が

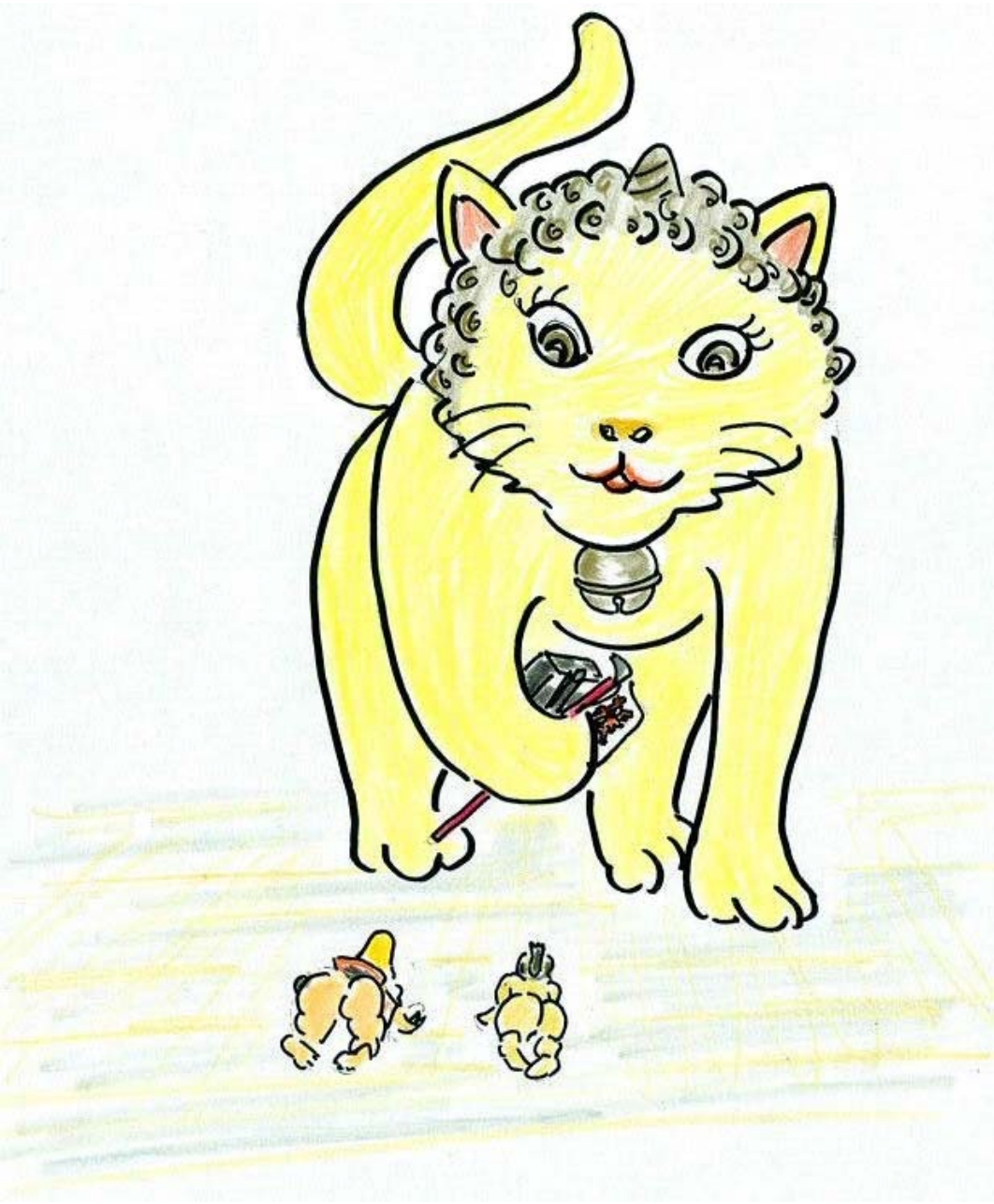
響き、更に天上から

「それは良かったの。」という声を聞いたような・・気が・・したのですじゃ。

いかばかりの刻が過ぎたのでしょうか、あっしが目を覚ますと目の前にはミー

殿が・・

いやミー殿に似た何かが、あっしの挟み箱と旦那様の旗指物を右の前足に抱えて立っていたのじゃ。



（つづく）